北海道に於ける英學の發達

玉井武

序言

日本に於ける英学發達史の研究は、今日までに相當の歳月を加えて來て居るにも係らず、北海道は未だその研究對象として取り上げられる事なく放置されて居た。然るに今を去る約百年、嘉永の末期にアメリカの軍艦を率いて、提督ペルリが來朝した時に、幕府と米國使節との間に立つて、條約成立に蔭ながら盡力した森山榮之助外十三名の通詞達に、わが國はじめての Living English を教授した人は、その名を Ranald Macdonald と云い、嘉永元年（1848）利尻島に漂着した米人である。宗谷から松前に護送され、更に長崎に廻されて取調をうけ、同地閉居中を利用して、前述の通り若い通詞達に英語教授の機会を持つたのであるが、吾が通詞達の和蘭式發音を匡正し、鎖國的な英語の学習を正道に導く最初の機会を與えて呉れた英学の恩人が、北海道の一離島に漂着して始めて日本の土を踏むに至つたと云う事は、實に深い興味を吾々になげかけてやまない。

更にその十四弟子の中で名村五八郎・堀達之助の二人はペルリの箱館來航以後、次第に海外との接觸の繁くなる北部日本唯一の開港場に於て、箱館奉行の下に通詞として勤務し、その傍ら後進の指導に任じたのであるが、名村五八郎は、つとに嘉永年間に出版せられた「エゲレス語辭書和解」の編者の一人であり、堀達之助は、我國最初の活字本英和辭書たる「英和對譯袖珍辭書」の主任編集者である。此の様な幕末に於ける英学の代表的人物を北陬の地に迎えて、北海道――當時の蝦夷地――が英学入門第一歩を踏み出し得た事は、之亦北海道英学發達史上輕視することの出來ない事柄である。

北海道が歐米諸國と最初の交渉を持つてから今日まで約三百年を經過して居るが、此の論稿では當初から徳川末期までの二百餘年を研究の對象とする。

第一章　黎明以前の英学

一　和蘭船の來航

安永九年、家老松前廣長が、藩主松前道廣の命を受けて編纂した松前藩史料の大集成たる「福山秘府」を開くと、次の一文に出会う。

寛永二十癸未年七月十二日阿蘭陀船漂着于東夷地アッケシ

即、これは北海道が歐米の船舶の來訪をうけ、海外と接觸を持つに至つた最初の記錄である。今少しく之を說明するに、寛永二十年とは三代將軍德川家光の鎖國令直後の時代で、今を去る約三百年、西歷一六四三年に相當し、歐州に於ては Marco Polo の「東洋紀行」によつて、日本が黃金島として紹介された結果、歐州探檢家達の間に異常なる東方航海熱をおこして居た時であつた。西班牙商船によつて噂が始まつたと傳えられる「東方の金銀島」を探ねあてようと、各國が競つて船を東洋に出して居たが、當時隆盛を誇つた和蘭の國も此の熱に洩れる筈がなく、各國に伍して、幾度か東洋探檢の船を送り、たま〳〵東蝦夷地厚岸港に漂着した前記の船はその第二回探檢船に屬するものであつた。即、カストリクム、プレスケンスの二船に、各々五十名の船員が乘組み、一ケ年の食糧を積み、Martin Gerritz Vries を指揮者として、東洋經營の根據地 Batavia を出帆して探檢航海についたが、途中大暴風に遭つて二船は連絡がとれず、カストリクムは北東の方向に流されて、ウルップ島に漂着し、同島に上陸して、東印度会社の記號(VOC)と年號(1643)を刻んだ十字架をたて、島をCOMPAGNIES LANDと名附けて更に北上し、韃靼方面に向い、南下してエトロフ水道をすぎて、東蝦夷地の一漁港厚岸に着いたのが、前述の寛永二十年七月十二日であつた。極東の一孤島に英学の種子を蒔き、日本英学史に三浦按針の名を以て永く記憶される William Adams が、豊後の大分浦に漂着したのは、僅かに此の厚岸寄港事件に先立つ四十三年、慶長五年(1600)の事で、船も同じ和蘭國籍の Liefde 號であつたが、南に漂着した此の船は日本英学産みの親を乘せ來つて、東方の一孤島の文化に大きな功績を殘したのに反し、厚岸に寄港した和蘭船は、蝦夷地の文化に何等の光明を投げることもなく、僅かに「福山秘府」に、

船長三十尋幅四間程船中石火矢拾五六挺仕掛之

とあるところから、船の大いさを想像し、砲十五六門を備えて居た事を知るに過ぎないのは蝦夷地とは云え餘りに淋しい。これは偶々交易の用務を以て同地に來会わせて居た松前藩の上乘役小山丑兵衛が、松前に申達した報告の一部である。同船は十七日間厚岸灣にあつて船體を修理の後、探檢の船旅を續けるために再び南方へ立去つた。

二　魯・佛・英船の來航

露西亞の船が北海道の近海に出沒する樣になつたのは、和蘭船の來航に比べると大部おくれている。最初は千島の諸島を訪

れる程度であつたが、ケレトフセ等が交易を求めて遙々本土の根室と厚岸に來航したのは、夫々安永七年、八年(1778, 1779)の事である。

ケレトフセ等の來訪におくれる事十年、天明七年(1787)には、佛人 Jean-Francois de la Perouse の一行を乘せた探檢船が、對島海峽から歐人として最初の日本海入りを試み、沿海州方面を探檢の後、南下して宗谷海峽に出た。歐人の同海峽通過はこがはじめてで、此れから後 La Perouse 海峽として海外に知られるに至つた理由もここにあるのである。La Perouse 一行は別に本土寄港の跡をのこしては居ない。

これより先き、露國は南下を企て、十七世紀の末頃から我が漂流民を介して日本語を學んで居たが、寛政四年(1792)九月に至り、使節 A. K. Laxmann が、女王エカテリナ二世の命を奉じ、通詞及び幸太夫・小市・磯吉の漂流民生存者三名を伴い、エカテリナ號に乘つて根室に來航した。一行は季節の關係で根室に越年するのやむなきに至つたが、報に接して松前藩が同地に派遣した藩吏のうち、工藤平右衛門・米田右衛門及び醫師加藤肩吾の三名は、露人と半歲にわたる折衝の機會に惠まれ、その結果一通りの露語と外人應待の要領に通ずることが出來、これが續いて來航した英國船の應待に役立つ貴重な經驗となつたのである。

次ぎに英吉利と北海道との關係は、Laxmann におくれる四年の寛政八年(1796)八月虻田寄港の英船 Providence 號に始まる。これは英國海軍の派遣にかかわる日本近海探檢船で、W. R. Broughton の指揮のもと百餘名を以て、前年母國の港を出航し、南海の探檢から北上して虻田に來たものである。松前藩吏が幕府當局の尋問に答えた「顚末書」によれば、八月十四日の暮方異國船アブタ沖合に碇泊に付、急飛脚を以てヱトモ(今の室蘭)止宿中の家老松前左膳に報告、左膳は夜通しでアブタへ到着、早速家來を異國船に派したのであるが、その模樣は前記「顚末書」の原文によれば、

右蠻船爲二見屆一、家中之者兩人差遣候處、一向に言語不二相分一候間、早速急飛脚を以、若狹守方へ致二注進一候。

とある。寛永二十年に厚岸へ寄航した和蘭船については、異國人との應待の模樣が明らかでないが、何れは手眞似で問答を交わした事かと想像される。虻田の場合は、急飛脚の注進により、派遣人物の詮衡が行われ、寛政四年に Laxmann 應接の經驗をもつ工藤平右衛門、米田右衛門、加藤肩吾等が急派された。三名は八月廿五日の朝、羽織、野袴ついでたちで、家來を召連れ、蝦夷舟三艘を以て異國船に乘つけ、醫師加藤肩吾が通詞の勞をとつた。前記「顚末書」によれば彼の報告は次の通りである。

私ども蠻船え乘移候處、蠻人頭分「カピタン・フラツンヤニツク」、「イワン・ワワウイナヘルトルナ」、「アヒツアラ・マツチ」罷出、私共え腰掛を差し出し、蠻人頭分三人も腰掛え直り、其後蠻人共、私共三人之前後左右を武器を以相圍罷在候。

異國人三名の名前の報告によつても分る通り如何にも心細い英語の受取り方である。尤、此の虻田入港の英船 Providence 號におくれる十二年、文化五年(1808)に、同じく英船 Phaeton 號が長崎に入港した際、同地の和蘭通詞に一人も英語を解する者がなく、爲に大きな行き違いが起り、長崎奉行等の自刄となつた事を考え併せると、此の程度のことは北邊の蝦夷地としては無理からぬ事情と同情される。露西亞語を以て露人と應接の經驗を活用して、加藤肩吾が巧みに蝦夷地來航の目的を乘組員の一露人から明らかにするを得たのは寧ろ望外の幸とも云うべきであろう。

私相尋候は、何れ之國の船に候哉、ヲロシヤ船に而は無之哉と申候處、アンゲリヤの船の由相答申候。尤ヲロシヤ人一人乘合罷在候に付、右ヲロシヤ人を呼出し、通詞爲致、相尋候は、何之用に有之此所え參候哉。委細可申達旨申述候處、蠻人共相答候は、カントンえ商賣に參り候由に而、當四月アンゲリヤ出船、南アメリカの内ハラシリヤえ著船、夫よりイウワゴウランデヤえ參り、夫より北アメリカの内ヱリホウリニヤえ參り、夫よりカントンえ參り候道、日本南海にて大荒に出合、既に船も危く、猶又薪水不足致し、此所え漂着仕り、右薪水取入次第、早速出船可仕旨相答候。依而船中乘組人數幾人有之哉と相尋候處、人數之義は百十人、内女一人。右女は小船頭女房之由。且又荷物之義承り候處、茶、砂糖、多葉粉、麥、皮類、其外種々積入候由に御座候。又々私共より申聞候は、此處に當年越年致間敷哉と、種々申聞候得共、決而滯船難相成旨申候。左候はば二ケ月、三ケ月も差留り可申旨、色々申聞候得共、左樣致候ては、カントンえ參り商賣仕り、本國え歸り候に、甚だ遲成候間、今四五日順風見定め、出船可仕旨申聞候間、罷歸り、左樣申達候。

英船來航の目的は以上の通りであるが、これは表面上の理由で、探檢・測量がその主目的であつた事は、Captain Broughton が後に至つて著した處の Vayage of Discovery to the Pacific Ocean に明らかである。Broughton は此の機会に北部日本地圖を寫すことを許され、その返禮として Captain Cook の航跡を示す世界地圖を贈つて居る。英船は滯留二週間、薪水の補給、船體の修理、沿海の測量等を行い、偶々病歿した一水兵 Olason を灣内の小島に埋葬して、二十九日に千島に向つて出帆した。

參考までに當時の人々の外國に對する智識の程度を「蝦夷草紙」(寛政二年、最上德内著)に求めてみる。

「……暗に考ふるにヱゲレス國の所領は北アメリカに二十五ケ國あり、此國より舟を出し、西北へ馳せ、カムサスカにて赤人どもへ尋問いたし、蝦夷地邊より西南印度國の所領へ往返するならん。加藤省吾(註―加藤肩吾のこと)應待の時、是よりカントンへ行くと答へたり。カントンは印度内スモタラの地名にて、即ちヱゲレス國の所領なり。……」

Captain Broughton は、翌寛政九年再び北方探檢の途中に

北海道に寄港して居る。彼は澳門で越年し、同地で八十七屯のスクーナー船を買いととのえ、Providence 號と二艘で再び北方探檢に向つたが、途中 Providence 號破損の爲、スクーナー船に乘換え、人員整理の後三十四人の乘組員で、日本本土に沿うて太平洋を北上し、寛政九年（1797）七月ヱトモ（現在の室蘭）に入港したのである。「東蝦夷地ヱトモえ漂着蠻船一件」によれば、異國船がヱトモへ漂着したのは七月十九日の夜で、同所の運上屋番人からの報告により、急飛脚が城下表に差立てられ、前年の經驗を以て、工藤平右衛門、加藤肩吾が即刻出發、廿六日ヱトモに到着し、異國船の取調を行つた。その報告によると、

右船え乘移り候處、異國人頭分ブウツン其外下々迄、去年參り候アンゲリヤ人共多く御座候間、何用に而何國へ參り候哉、且其許共本國何月何日致出帆候哉之趣相尋候處、當二月五日アンゲリヤ國出帆、ハラシリヤへ參り、夫よりノーワヤコウランテヤえ參り、夫より支那カントンえ商賣に參り候道にて、水木切らし、右辨用仕度、此所え著仕候旨申聞候。

前年同樣、支那關東に商賣をするのが目的である樣に申立てて居るが、彼等の目的が探檢にあつた事は疑いを容れない。尙スクーナー船の樣子等に就ての報告は左の通りである。

一、乘合人數三十四人、積物米、多葉粉、砂糖、麥粉等積入候。器物は唐物之品多々有之候。其外唐本の四書相見へ申候。

一、雁十四羽、家四疋、鷄二十羽斗り、犬一疋相見申候。

一、去年歸帆之節、南部領三日、仙臺領二日、房州二日、上總一日、夫より四國之內、阿波等致一見候海岸之繪圖面取り出し爲見、並に別に細畫に而彩色致し、國々の名を日本詞に而相記置爲見申候。

一、蠻畫にて長崎より江戸迄之町圖、並日本詞にて地名等巨細に相認爲見申候。此圖如何致所持有之哉之趣相尋候處、阿蘭カピタンに附參り候醫師あらはし候書之由申候。右書之內、日本詞多く書き記し、私共へ爲讀聞申候。

Captain Broughton は舊知のよしみを示し、スクーナー船內の案內などをしたが、工藤・加藤等松前藩吏は、前回の如き親しみを以て接せず、監視の手をゆるめなかつた。一方、下國武、新谷新六左衛門、山岡右衛門をはじめとし、組侍、組足輕、同勢三百人程で內浦灣岸ヱトモに五里の距離にあるサワラに著し、「翌朝日和次第ヱトモに渡海し、異國船を打崩し、手餘る時は組打にせんとて、武具を飾り、甲斐々々しき勢」（蝦夷草紙による）を示した處、同船は形勢を察知して、閏七月二日に帆を上げてヱトモを出發、津輕海峽を經て西に立去つた。松前勢は異國船に所謂「遠眼鏡」の備えがあり、それによつて形勢豫知の結果帆出したことを知らず、卜筮によつて占つたものと推定するもあり、加藤肩吾が內通によると考えをまわす者もあつた。尙此の時の調査によつて作成された地圖を Perry 一行が携えて再び內浦灣を訪れているのは感慨深い。この樣に北の松前領には、寛政八・九年と二ケ年にまたがつて Captain

Broughton が漂着を裝つて來航してゐる時、南、長崎には、W. R. Stewart を船長とする米船 Eliza 號が、寛政九年十年と連續の來航を試みてゐた。徳川幕府の和蘭語のみに依存する從來の方針を一擲して、英学に對する見解を時代に即せしむべきは當に此の時機ではなかつたろうか。

第二章　黎明期の英學

一　日本英学の恩人 Ranald Macdonald

千島列島近海測量のため來航して、幽囚の身となつた露西亞の Kapitan Golovnin の事件も、文化十年（1813）には落着して、露國との紛擾も一段落がついたが、我が國の沿海、殊に北海道近海に出沒する外國船は年と共に增加し、從つて薪水を求め、暴風雨を避けて、各地の港に寄港する船の數も次第に增して來た。當時北太平洋方面に出動の英米捕鯨船だけで百隻を超えてゐたと傳えられてゐる。これは歐米の捕鯨業者が活躍の舞臺を、大西洋方面から此の方面に移した事によるものであつた。弘化三年（1846）五月、エトロフ島で松前藩の手によつて救助され、翌弘化四年六月長崎に送られた七名の米人も、調査の結果、米國捕鯨船 Lawrence 號の乘組員である事が判明した。續いて嘉永元年(1848)五月には、同じく米國捕鯨船Lagoda（エラ）號の乘組員たる十五名の米人が、津輕海峽近くの江良（マチ）町村に於て松前藩の救助を受け、ついで長崎に送られたが、此の中に利尻島字ノッカに漂着した米人一名が加えられた。此の一名の米人こそは日本英学史に於て忘れる事の出來ない地位を占める Ranald Macdonald である。

Macdonald はスコットランド人の父とアメリカ・インデアンの母の間に生まれた運命の子で、長じて一人の婦人と戀愛問題が生じた時、彼がインデアンの血をひいて居ると云う事が妨げとなつて、彼は此の結婚を斷腸の思を以てあきらめなければならなかつた。偶々東洋の孤島日本に關する多少の智識を持つて居た多感の青年 Macdonald は、太平洋の彼方に眠る孤島日本へ渡航の決心を固めたのである。新らしい天地に於ける彼の希望は、近い將來に開かれる筈の日米通商の際に、通譯として活躍する事にあつたものの樣である。

彼は日本渡航の手段として船員になる事を考え、一八四五年（我が弘化二年）に捕鯨船 Plymouth 號に乘組み、一八四八年（我が嘉永元年）の春には、二十四歳の青年として憧憬の日本海に到り、船長の了解を得て、母船から孤舟に移り、自らの手で母船と孤舟をつなぐ綱を斷ち切つた。その場所は實に北海道の近海であつた。

A sailor, in his manhood, has tears!—Myself, with averted face, had to cut the rope by which I hung to all them. I felt in the cord the strong electric sympathy bursting from the true friendly hearts of my comrades.

これは彼が親船との別離の苦衷を物語つた端的な述懷である

が、惻々として胸をうつものがある。七月二日利尻島に漂着、宗谷勤番所から松前表にまわされ、一應の取調の後江良町村漂着の米人十五人と一緒に長崎に護送されたのは十月の中旬であつた。翌嘉永二年（1849）四月に漂流米人引取りのために米國軍艦 Preble 號が長崎に入港する迄の半歲、幽囚の身を以て特に許されて長崎の通詞達に英語の教授を行うと共に、海外事情の智識をも與えて居る。これより先き德川幕府は英語の必要性を痛感して、長崎の和蘭通詞達に和蘭語の外に英語の習学を命じ、通詞達は文化六年（1809）より、英語の研究を和蘭人 Jan Cock Blomhoff について始めるに至つた。本邦に於ける英学研究の曙はここに始まるのであるが、和蘭式發音の指導をうけたために、彼等の英語は英米人の耳には實に異樣にきこえたらしく、Macdonald も彼の應接に當つた和蘭通詞森山榮之助の英語を、

His pronunciation was peculiar.

と評して居る。從つて此の和蘭流の發音を米國式に修正して本格的な英語教授によつて日本に正統英学の種子をおろした所の恩人は、北海の一孤島利尻に漂着した米國青年 Ranald Macdonald に外ならぬのである。これは實に、我が國英学史上に於て、特筆大書さるべき事柄である。此の時 Macdonald の教えを親しく受けた者は、森山榮之助、本木庄左衛門等通詞中の学才十四名であるが、後に箱館の英学創始に貢献するところ大なる名村五八郎、堀達之助の二名をその中に見出す事は、Macdonald と漂着地「北海道」とを結ぶ絆として感慨深いものがある。

二　Commodore Perry の箱館來航

安政元年（1854）Commodore Perry の再訪によつて、德川幕府は遂に意を決して、神奈川條約の締結を斷行し、箱館は下田と並んで開港される事になつた。米國漁船の漂着繁き北海道に缺乏品の供給と、漂流米國漁民保護のために一港を開くことは Perry の強い要望であつた。彼は神奈川條約の成立と共に、箱館港の調査を企圖し、翌四月には軍艦五隻を指揮して北上の途についたのである。米艦來航の報に接した松前藩は、狼狽の中にも準備を整え、家老松前勘解由、用人遠藤又左衛門以下を應接掛とし、嚴重な警衛の中に異國船の入津を待つた。先發の Macedonian, Vandalia, Southampton 三隻が、勇姿を箱館沖にあらわしたのは四月十五日で、野袴・割羽織に身を固めた應接係の代島剛平、蛯子次郎等は早速小舟を仕立てて、來航の米艦に趣いた。Perry の旗艦 Powhattan が入港するまでの一週間を、專ら此の三隻の應接に當つたのであるが、その時の實況は、蛯子由本の筆になる「松前勘解由殿御用記寫」によつて片鱗を覗う事が出來る。

晝九ツ時頃二番入津ノ夷船より橋舟貳艘へ小旗相立多人數乘組山背泊臺場へ向漕寄上陸可致樣子ニ付兼而相詰居候固人數罷出上陸致間敷旨手眞似に而相制候處直ニ貳艘共沖之方へ漕

出辨天崎之方へ向漕參候に付不取敢遠藤又左衛門藤原主馬兩人之者辨天崎へ差遣見分爲致候處内淵之方へ乗入候様子之趣注進ニ付猶又石塚官藏關央其外應接方等沖之口役所え相詰候處無程同所へ漕寄候ニ付固人數罷出致上陸間敷旨手眞似ニ而相制候得共一向聞入不申兩艘共同所上り場へ漕付上陸いたし候に付代島剛平罷出沖之口役所へ案内致候處船長體之夷人三人紺羅紗之頭巾同筒袖同股引着用兩肩先へ金ニ而房様之もの相懸ケ居劍を帶罷在外ニ着股同斷ニ而肩ニ飾無之劍も帶不申異人壹人付添合四人罷通り肌着座迷惑ニ付腰掛ノ者貸吳候様仕形いたし候に付有合候机へ毛氈を掛差出應接之者罷出上陸之次第相尋候處附添候異人筆墨を請暫時筆談に及候得共事情確ト相分兼候趣尤鮮魚野菜等求度趣ニ付承知之旨相答候處異人共至極平穩ニ而晝八ツ時元船へ致退去候……

これによつて明らかな通り、言語は全く通ぜず、筆談も難航で、僅に手眞似を以て用を辨ずる有様であつた。前述の御用記寫の「一番應接」の中にも、

年頃五十餘にも相成可申哉船長にも可有之か紺羅紗筒袖同色の股引着用致し居候もの罷出腰掛へ坐を占頻に何か申述候得共言語一切相分不申メリケンと申事のみ相分候外何事も通し不申候船之名類船之様子乗組人數等手眞似致し相尋候得共分り不申様子に有之

と記されてあり、手眞似應答も容易でなかつた様である。此の「御用記寫」によると、米艦側の希望に應じて、薪・水は勿論魚類・野菜類などを與えたと報告されて居るが、何れも「貳番入津之異船に而は水桶大小三十六渡遣是にて運吳候様仕掛いたし候」とか、「右船にも薪水遣吳候様手眞似いたし候」の如く、言語を通じての了解ではなかつた。

四月廿一日には、Commodore Perry が旗艦 Powhattan に坐乗し、Mississippi を從えて入港した。同日の「御用記寫」によれば、

ウリヤムスと申異人日本語に而種々申聞確と聞取兼候

と通詞ウリヤムスの日本語が仲々分り兼ぬた事を率直に記して居る。然し彼等の領解し得る日本語も相當あつたことは次の一文から想像されよう。

日本通詞三畏衛廉士ウリヤムスと認候手札差出日本語を以一通挨拶いたし浦賀にて御渡之御書翰はマシトニアンと申船に差置候間御同道申候て御渡可申旨申聞……

尤も筆談の方は、主としてウリヤムスが關東人羅林に話をし、羅森がこれを漢文に認めて、折衝したものの様である。一例を擧げると、

現今如所示政府未令回答之不可輕忽群官会同商議々定而後答之

右之通申聞候所於席上ウリヤムスより申聞候次第廣東人羅森認差出候書面左之通

本大臣事務甚多不能久時……

Perry は松前藩主自身應接に見えぬ事を不滿に思い、又神奈

川で面識のある御徒目付平山謙次郎や通詞名村五八郎が、北上して來て箱館に於て会見の手筈になつて居るのに、未だ姿を現さぬことに焦燥を感じて居た。幸い、五月五日の朝、平山謙次郎は支配御勘定の安岡純之進、蘭学者武田斐三郎等と共に到着翌六日、沖之口役所より小舟にて米艦に向い、應接に當つた。此の時に蘭学者武田斐三郎の協力を得て、使節船への書翰は漢文の外に蘭文をも添えることが出來た。米國の使節側は平山等の來訪によつて一應わだかまりも解け、又箱館港及び内浦灣の具えて居る條件の優秀なる事を知つて滿足もした。

The spacious and beautiful bay of Hakodadi, which for accessibility and safety is one of the finest in the world, lies on the north side of the Strait of Sangar.

* * *

Every one on board the ships who had visited Gibraltar was struck with the resemblance of Hakodadi, from its position and general aspect, to that famous fortified town.

* * *

Hakodadi, like all the Japanese towns, is remarkably clean, the streets being suitably constructed for draining, and, kept, by constant sprinkling and sweeping, in a neat and healthful condition.

これは一八五六年にワシントンで發行された Narrative of the Expedition of an American Squadron to the China Seas and Japan performed in the years 1852, 1853, and 1854 under the Command of Commodore M. C. Perry, United States Navy からの拔萃であるが、彼等の箱館港に對する見解を察知するに足ると思う。又開港の曉に於て果すべき同港の役割については次の一文が之を明瞭にして居る。

Hakodadi, in the future, will probably be frequented by our whalers, as it is conveniently situated to their resorts. Von Siebold states that sixty-eight square rigged vessels were counted by the Japanese as passing Hakodadi and Matsumai in one year, and probably nearly all these were American, and most of them engaged in whale fishery.

又内浦灣調査のため Perry は軍艦 Southampton を派遣し、Lieutenant Commanding Junius Boyle には特に次の様な指令を送り、克明な探査を要求して居る。

……and there employ yourself and all under your command in making as perfect a survey of the port as time and circumstances will allow, being careful to collect such specimens of fishes, shells, birds, plants, minerals, &c., as it may be practicable to obtain during the time you may be there.……Determine the positions of the prominent headlands; note the time of tides,

their set and velocity, and vertical rise and fall.

此の様にして米艦は一應來航の主目的を果し、滯在二十四日の後、五月八日箱館港を拔錨して再び下田に引返した。

名村五八郎が英語通詞として此の北陬の港に來任する迄は、英学の曙光はまださしそめない狀態であるが、神奈川條約によつて、安政二年（1855）三月からの開港が決定し、次で英吉利・露西亞とも同樣の條約が成立した今日、箱館は北海道に於ける英学の發祥地たるべき運命、否、使命を擔わせられて居たのである。

三　名村五八郎・堀達之助と英語稽古所

箱館の開港は當初薪水や食料補給等の爲に過ぎなかつたが、來港船舶の數も次第に增加し、領事・貿易事務官等の止宿も豫想されて居ただけに、各方面に人材を求めて止まなかつた。英語に熟達した人物の必要もそうした實情から痛感される處であつた。北海道――當時の蝦夷地――に英学の種下しの役目を果しに遙々津輕の海を渡つて來た通詞が名村五八郎である。彼が利尻島に漂着した米國青年 Ranald Macdonald の十四弟子の一人である事は既に述べた處である。家は代々長崎の和蘭通詞で、五八郎も和蘭通詞として身を立て、傍ら英語、露語の習学をも疎にしなかつた。Perry 來航の際、浦賀表に於て之が應接に當り、阿蘭陀小通詞並の資格を以て、名村五八郎が縱橫の活躍を試みたのは、彼が Macdonald 門下の逸足であつたからである。Perry が箱館に來てからも、彼の名前を記憶して、平山謙次郎と同道で江戸表より松前へ來る日を待ち侘び、松前藩の應接係と再三交渉を試みて居る。從つて次ぎの回答を得た時は非常に落膽したのである。

They stated that the officers from Yedo, who had been delegated to meet the Americans at Hakodadi, had not yet come.――Narrative of the Expedition of an American Squadron, vol. I. p. 434.

彼が當時の英学界の俊秀であつた事は、夙に嘉永年間に於て森山榮之助、西吉兵衛、楢林榮七郎等と協力して、「エゲレス語辭書和解」を編纂して幕府に奉つた一事でも想像されよう。

安政三年に名村が來任する直前の箱館港に於ける外國船出入の狀況を一覽するに、安政元年以來其の數を漸增し來り、開港と共に激增し、安政二年四月（開港の翌月）から向う一ケ年の合計は米國軍艦・商船八隻、英國軍艦・商船二十隻、佛國軍艦四隻、獨逸商船一隻の多數に上り、英語に通ずる專任通詞の居らぬ事は一大支障となつて來た。當時此の地には、Perry 來航の節、平山謙次郎と共に應接に當り、專ら筆談を擔當した武田斐三郎が居て、英学の研究に精進を重ねて居た實情は後述する處であるが、元來斐三郎は此の道を專門とする者でなく、又特に会話は得意とする處でもなかつたので、松前藩は安政三年八月名村五八郎を招いて、箱館奉行支配調役下役格に任じ、北の開港場に於て歐米人應接の衝にあたらせた。一方奉行所は時代

の趨勢が英学の振興を必要とする事を痛感し、五八郎に命じて、職務の傍ら奉行・支配などの子弟を募つて、英語の教授をなさしめた。この目的は主として通詞の養成にあつて、英語一般の研究ではなかつたが、兎もあれ、北海道に於ける英学の炬火は、實に名村五八郎によつてかかげられたのである。これは實に幕府が洋学所開設の一年後の事で、此の年長崎奉行から幕府當局に向つて英学奬勵方を願出て居る事や、幕府が蕃書調所の開校式を擧げたのが此の翌年である事等を考え合わせると、箱館奉行の英斷を尊敬せずには居られない。文久元年（1861）新築の運上所構内に稽古所の設けられるや、五八郎は愈々後進の養成に力を致し、英学勃興の重責に任じた。此の間、万延元年（1860）には遣米使節新見豊前守の隨行を命ぜられ、箱館奉行支配定役格通詞の資格を以て渡米し、Macdonald に指導された彼の語学力に一大錬磨を試みる機会に惠まれた。時に年齢三十四である。幕末當時の箱館港の教育施設としては、侍達のために奉行所内に設けた文武修業場の外、鹽田順菴を教授役とする学問所、經書の講読や心学道話を中心とする一般市民の爲めの講釋所（一名正修舍）、蘭学者武田斐三郎の主宰する諸術調所等があつたが、名村の門下は、武田の塾生と相並んで逸材を輩出した。その中には、後に James Curtis Hepburn の薫陶をうける益田孝及び三田佶、通詞としては鹽田三郎、海老原錆四郎、南川兵吉、近藤源太郎などが數えられる。中でも立廣作は頭角最もあらわれ、文久二年（1862）十二月齡二十二歳にして、箱館奉行支配定役並通辯御用の資格で、遣歐使節竹内下野守の一行に隨つて渡歐して居る。運上所保管の「應接之留」を調査すると、翻譯和文のあとに、

右和解仕候以上　　立　廣作

一読仕候處相違無之候　　名村五八郎

と弟子と師匠の連署して居る箇所を見出すが、之は門下生の試みた譯文を、親しく師匠が目を通して奉行に提出した事を物語つて居るものである。（因みにかゝる連署は前記「應接之留」の隨所に見出されるものである。）

當時の通詞達の持つて居た英語表現力の實態を一瞥して見よう。文久二年（1862）から明治十五年（1882）までの約廿年間に亙る北海道の旅行を記した箱館在住の英國商人 T. W. Blakiston の著述 Japan In Yezo の中に、松前の役人から米國代理領事に提出された一文がのつて居る。

"To W. R. Pitts, Esq.,

"Acting Consular Agent of U.S.A.

"Owing to enquar something to Kods-Jro, boy employed by Mr. Fletcher your resident merchant, I beg you to tell him the said boy come ; when the inquarement is done he (boy) will be returned.

"Katsuda-Egono-Kame.

"1st year of Bunque,

"13th of 9th month.

"October 16th, 1861."

同じく Japan In Yezo 中にある運上所通詞から英國一商人に送られた書簡を紹介すると、

"To Alex. p.p——, Esquire.

"Sir,——I request you to ask some bottle of Gine, as I want to use every morning for my stomach, or if you have got it for sale, tell me can you sell me some?

"With respect,

"Kisi."

"29th of 9th month."

當時は未だくボン式羅馬字綴りもなかつた事であり、從つて小次郎を Kods-Jro、文久を Bunque、勝田伊賀守を Katsuda-Egono-Kame と綴つたことは取上げないとしても、英語の綴りや文法の誤り、引用符の濫用、さては行文のたどゝしさなど、隨所に心細さを感じさせられる。之を裏書するかの樣に箱館奉行村垣淡路守の公務日記にも

通詞英語不熟に付當分品川藤十郎詰申渡候段御勘定所江掛合之義申遣す

と云う記事を見出す。（註—品川藤十郎は大橋宥之助、向山榮五郎力石勝之助などと共に各御用留や前記の公務日記に屢々出て來る通詞である。）尤もこれは安政四年十二月の事であるから、英学事始として大目に見れないわけでもない。前記 Blakiston の如きは日常生活に於て一應不自由なく意志の疎通を計れたものと見え、彼等を寧ろ賞揚して居る。

Since the treaty made by the Americans in 1854, the Japanese government had caused a number of young men to be instructed in the English language, and the proficiency which many of these interpreters had attained, reflected the greatest credit on the pupils, and certainly shows the native ability. I often conversed with those attached to the custom house at Hakodate, and must admit that, excepting some few peculiarities, a slight admixture of Yankee expressions, and a few words of Canton-English, they spoke better than many who call themselves educated persons in England.

英國仕込と自稱する手合よりも英語をこなして居るとは、少々面映い氣もするが、Blakiston の箱館在留は文久元年に始まつたもので、名村五八郎は既にその前年の一月品川沖出帆、亞米利加に渡り、その年の秋九月に歸國して、磨き上げた英語を以て、門弟達の指導教育に新たな意氣をこめて專念した事であろうから、立廣作と肩を並べる俊秀も出たことと推察される。名村五八郎は、元治元年(1864)勘定格通辯御用頭取に任ぜられ、稽古所の教授は堀達之助にゆだねて江戸に移り、維新後は別に官職に就くことなく、餘生を東京で送つたと傳えられて居る。

名村五八郎の跡をうけて、箱館奉行支配英語通詞となり、兼て稽古所の教授をつとめた堀達之助は、文政六年（1823）長崎

に生まれ、蘭語学習の後和蘭通詞となり、学才が認められて、Macdonald の十四弟子の一人に擇ばれ、名村五八郎と共に故郷に於て英語の学習に志した人である。嘉永六年（1853）Commodore Perry の率いる軍艦の浦賀表來航の折は、阿蘭陀小通詞として縱横の活躍を示し、日米國交の確立に貢献する處すくなくなかつた。遠來の黒船に乘付け、蘭語と英語の二ヶ國語を操つて、通詞の重責を果した時の模様は次の對話書に明らかである。

嘉永六年癸丑耶蘇紀元一八五三年

六月三日浦賀表米船對話書

六月三日未上刻頃、異國船渡來之注進有之ニ付、應接掛浦賀奉行與力中島三郎助、香山榮左衛門、近藤良次、佐々倉桐太郎、其外同心、通詞堀達之助、立石得十郎差添、一番御用船へ乘組、未中刻頃、右異國船四艘共、浦賀沖より鴨居村沖に投錨船繋いたし候に付、右四艘之内何れへ乘付候方可然哉と申合候處、通詞共より、中檣へウインブルを揭げ候蒸氣船相見え候、右ハ外國之法に而、主役之者乘組居候標章ニ付、其船に乘付可然旨申出候間、則右船に乘付、何國之船に而、何用有之致渡來候哉之旨、蘭語を以通詞共より相尋させ候得共、蘭語不通之樣子ニ付、尙阿蘭陀語相辨候者乘組之内に無之哉と、尙又アメリカ語を以相尋候處、漸相通し、阿蘭陀語相辨候アルセホットメンと申者出來ニ付、應接左之通。……

蘭語を以て應接の役を果そうと試みた處を見ると、達之助は英語よりも蘭語を得意として居たものゝ樣に考えられる。名村五八郎の「エゲレス語辭書和解」の編纂に對して、彼は「英和對譯袖珍辭書」を、文久二年（1862）西周、千村五郎、竹原勇四郎、箕作貞一郎等の協力を得、彼が主任格で編纂し、之が不完全ながら日本で出版された活字本英語辭書の最初のもので、その中の英語は和蘭から來た鉛活字を以て印刷されたと云われて居る。これ以後に出版された英和辭典の臺本となり、母體となつたのは實にこの辭書である。此の當時の英語の水準を示す意味に於て、同辭書の序文に認められて居る堀達之助の英文をここに引用してみる。

As the study of the English language is now rapidly becoming general in our country we have had for sometime the desire to publish a "Pocket Dictionary of the English and Japanese languages" as an assistance to our scholars.

In the meantime we received an order to prepare such a Dictionary as soon as possible having in view how indispensable is the knowledge of a language so universally spoken to become rightly and fully acquainted with the manners, customs and relations of different parts of the world and its daily important occurrences and changes.

The teachers of the School of European languages——

Messrs. NICI SUESKAY, TIMRA GORO, TAKEHARA YUSHIRO, MITSKOORI TETTSIRO etc. have most cordially lent us their valuable aid and have done all in their power to promote the object of this work.

It is our hearty wish that this work, however imperfect, may tend to assist those who may favor it with their attention and that the words which prove most useful in daily practice may be noted and any faults indicated in order that we may have every facility for improving the next edition.

YEDO, November, 1862.

HORI TATSNOSKAY.

此の序文にある School of European languages とは蕃書調所の事を云うので、彼は万延元年（1860）末以來同所英語教授出役を拜命して居た。名村五八郎によつて始めてかかげられた北門の英学の燈火が、彼の先輩格たる堀達之助によつて承け繼がれた事は、北海道英学發達史の上に千鈞の重みを加えるものであつた。然し乍ら、今や英学の振興は、各藩も幕府も――全日本がひとしく翹望する形勢にあり、堀達之助の如き大先覺を永く北陬の地に獨占することは許される筈がなかつた。果して慶應元年（1865）以降の開成所（註―蕃書調所の后身）人名錄には英学關係の教授職筆頭に、堀達之助の名を見出すのである。尙北海道との關係は明治五年まで續き、開拓大主典から一等譯官に昇進の上退官して居る。

四　武田斐三郎と諸術調所

諸術調所は安政三年の設立にかかわり、諸金分析・諸物製造の研究・洋学教授等が目的であつた。村垣淡路守の公務日記によれば、最初分析所として發足させる考えであつたが、「分析所ノ唱モ不宜候間諸術調所ト唱候樣」幕府の手前變更したものである。武田斐三郎を教授役とし、奥村季五郎を掛として任命し、當時の御殿坂（今の基坂）の西、斐三郎の役宅に隣合わせて建てられたもので、一切を斐三郎の主宰に委せ、大いにその經綸を發揮させたものである。

武田斐三郎は文政十年伊豫國大洲に生れ、初め漢書を習い傍ら醫学を修めたが、天下の形勢に悟る所あり、大阪及び江戸に赴いて蘭学に精進した人である。克苦勉勵の士で、巾の廣い学術の習得を心掛け、兵術・航海術・測量学其他の研究にいそしんだ。嘉永六年、斐三郎廿七歳の六月に、米國の軍艦相模に來ると聞き、事實探究の爲に同地に赴き、又同年十月、露西亞船長崎表に渡來の節は、蘭学者箕作阮甫に從い彼の地に出向き、安政元年には魯西亞船御用取扱の任命をうけた。同年三月、堀織部正、御勘定吟味役村垣與三郎に從つて、松前並に蝦夷地巡行を命ぜられたが、此時平山謙次郎と共に箱館に先行、Perry 應接に盡力した事は既に述べたところである。翌二年箱館詰となり、器械並に彈藥製造之御用取扱となり、次いで三年箱館奉

行支配諸術調所教授を拜命し、築城、造兵及び化学製造等を調査研究すると共に、兼ねて後進の指導に當つた。斐三郎は調所開設に際して、建白書を提出し、江戸表学問所の如きは官民公私の別が嚴しくて、野の遺賢を拾う所以ではないとし、諸術調所開設に當つては、水夫足輕の子弟に至る迄、志ある者には教育の機会を與えるべきであると献策してゐる。学生の指導については、原書生と譯書生の二部に分け、前者は文典・航海書・算法書等により、後者は各々譯書を以て教授し、毎月六回宛試驗を行い、その勤怠の狀を明らかにしたと云う。「陸軍歴史抄」によれば、

右斐三郎儀人物宜敷蘭学拔群出來英学モ兼用致シ学問モ宜敷築城砲術航海究理学分析術等夫々熟達罷在格別之者ニ御座候……

と言葉を極めて賞讃されて居る人物である。

斐三郎は箱館に渡來する外人につき自己の研究を深めんと常に志し、奉行所も亦、機会ある毎に彼の学術を活用し、且又探究を奬勵した。安政四年、米國商務官 Rice の來任するや、斐三郎が英語研究の爲に Rice の止宿所に赴く事を許し、同時に英船渡來の節は質問の爲此の船を訪ねる自由をも與えた。安政五年には米國軍艦ミシシピ號測量師ベコンに就き測量術の傳習や米國捕鯨船について捕鯨術傳習を命じ、又文久二年には亞米利加鑛山技師について、産金・分析術の傳習をなさしめているが如きは皆その例である。

此の鑛山技師とは William P. Blake 及び R. Pumpelly のことで、文久元年箱館奉行村垣淡路守、津田近江守が神奈川善福寺で米國公使 Harris と会見の際招聘を依頼したもので、兩人は文久二年（1862）二月横濱に到着、その際鑛山に關する器械・書籍等二十三箱を持參し、北海道の開拓に近代科学の應用を教えると共に運上所に於て鑛山学の教授を試み、後進國の学徒指導に稗益する處少くなかつた。

斐三郎はかくの如く熱心に学生の誘拔に精進したので、名村門下同樣優秀なる人物を多く世に送つた。英学者として後に薩摩藩に迎えられる前島密、長州藩から選ばれて英國に留学する井上勝、山尾庸三などはいずれも武田門下の逸材である。

斐三郎は十一年間の箱館生活の後、元治元年（1864）開成所教授並に任ぜられて江戸に赴き、明治四年兵武省に出仕し、砲兵大佐に昇進、士官学校学科提理となり、明治十三年病を以て歿した。

諸術調所はその後御殿坂より運上所構内に移轉したものの如くであるが、その徑路は未だ明らかにされて居ない。即ち、慶應二年（1866）諸術調所書類の一部を運上所に移そうとして、伺書を提出して居る事や、前述の Blake, Pumpelly が鑛山学の教授を運上所に於て行つて居る記錄から、その樣な推定が可能となるわけである。因みに前記伺書に記されている圖書の目錄は次ぎの通りである。

コヨット著　國土人種ノ說　千八百五十七年　一部

スチェレル著　小地圖　千八百五十一年　全一卷
エゲッシス合著　比較活物窮理書　千八百六十年　一冊
ゴールド
ジャームス著　獸類鳥類ノ形狀ヲ記シタル書　一冊
エキメン
ピッケリンク著　人種ノ記　千八百五十一年　一冊
ウールホース著　諸國度量ノ書　千八百五十九年　一冊
合衆國海軍ノ名簿　千八百六十年　一冊
合衆國將士ノ名簿　千八百五十九年　一冊
ウオルシステル著　英語韻府　千八百六十一年　一冊
フレシンク合著　佛語英語對譯韻府
チッビンク　千八百五十一年　一冊
同　四語對譯韻府　千八百四十八年　一冊
ウール著　諸藝諸製及び坑山韻類書　千八百六十年　一冊
貌利太泥諸藝韻類　千八百五十三年乃至　全二十二冊
千八百六十年　（內一冊目錄）

右は飜譯の節必要なりとして、運上所備付を上申したもので、恐らくは諸術調所の原書生一同の教授資料として用いたものではなかろうか。以て當時の学科內容を覗うに足りよう。

尙參考のために附け加えて置きたい事は、本夏（昭和二十五年八月）筆者が本論稿作成の資料を集める爲に函館市に赴き、渡島支廳の倉庫（明治十年頃建築のものと推定さる）に於て、最近發見された次ぎの書籍を親しく調査する機會を得た事である。

1. Encyclopaedia Britannica (8th Edition). 21vols.
2. Chambers's Encyclopaedia (1869). 10vols.
3. Biographical Annals of the Civil Government of the United States by Charles Lanman (1876).
4. English and Chinese Dictionary by Lobscheid (1869). 2vols.
5. United States Statute At Large (1815). 16vols.
6. The Pacific Law Encyclopaedia by Cowdery (1872).
7. Redfield American Railway Cases (1870).
8. U. S. Tariff (1869).
9. Description of the Various Silver Ores and Minerals by Blake (1861).
10. Naval Gunnery (1860).
11. Patent Office Reports (1858). 18vols.
12. Report on the Hokkaido Harbours by Meik (1887). 2vols.
13. The Design and Construction of Harbours by Stevenson (1864).
14. The State of Prison and Child-Saving Institutions (1880).

此の中で、Britannica 等には「箱館御役所」及び「箱館洋学所」の二つの刻印が押してある。

又 Report of a Geological Reconnaissance in California by William P. Blake (1858) には細ち和紙を貼り、ブレーキ

ズ・セオロチカル、レコノイセンス、イン、カルホルニエと縦書し、それに並べて、ブレーキ著カルホルニエノ地質探索ノ書と譯名を附してある。尚、「文久三年亥年正月ヨリ十二月迄運上役所應接室上留」に、「亞國鑛山家より差出候横文字書籍之儀に付申上候書付」として小出大和守が記して居るのは、此の「地質探索ノ書」についてである。此の書籍にも、「箱館御役所」、「箱館洋学所」と二つの刻印が押されて居る。これによつて推察するに、諸術調所は初め御殿坂の武田斐三郎役宅隣接地に建てられたものであるが、後に事情が生じて、英語稽古所の置かれてあつた運上所構内に移される事となり、これらの藏書は此の運上所で活用されて居たものであろう。調所並に稽古所が如何なる運營によつて德川末期から明治時代に移つて行つたかは尚今後の研究にまたなければならない。「箱館洋学所」と調所、稽古所との關係も、その時にはじめて明らかになることであろう。

（昭和二五・一〇・二八稿）

附記—本稿は昭和二十五年度文部省科学研究費による研究の一部である。